

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 11月 18日

派遣者氏名（専門分野）	岡田雅志（東洋史学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	近世～現代における越境するタイ族ネットワークとアイデンティティの研究
-------	------------------------------------

派遣期間

2012年 7月 20日 ～ 2012年 9月 28日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	フランス	パリ	Université Paris Diderot, Paris 7	Emmanuel Poisson Maître de conférences HDR
	フランス	パリ	国防省軍事史料館	
	フランス	エクサンプロヴァンス	海外文書センター（CAOM）	

派遣先で実施した研究内容

派遣者は、インドシナ半島を中心に国境を越えて拡散しているタイ Tay 族集団のネットワークと彼らのアイデンティティの動態を明らかにするため、これまでベトナム、タイ、ラオスの各地域において文献及び臨地調査を行ってきた。今次の派遣による調査目的は、フランスに保存されているインドシナ植民地文書の文献調査とインドシナ戦争後フランスに亡命した在仏タイ族コミュニティにおける聞き取り調査により、近世から現代までをつなぐタイ族集団のネットワークとアイデンティティ状況の解明のための基礎的データを得ることである。

以下、時系列に沿って今回実施した調査の概要を報告する。

【7月20日～8月1日、パリ】

パリでは、国家図書館及び国防省軍事史料館で文献調査を行った。特に国防省軍事史料館では、フランス軍士官により作成されたタイバック地方（ベトナム西北地方、タイ族の主要居住域）の民族誌や、インドシナ戦争期におけるタイ族のフランス軍への従軍状況に関する文書を収集した。これらの資料により、フランスに亡命したタイ族は、親仏派の首長層以外に、兵士として戦争に参加した人も多く、現代における越境移動及びネットワーク形成にも大きな役割を果たしていることがわかった。

【8月2日～9月14日、エクサンプロヴァンス】

エクサンプロヴァンスでは、海外文書センター-Centre des Archives d'Outre-Mer（2007年より国立海外文書館 Archives nationales d'outre-mer (ANOM)に改称）で文献調査を行った。ここには、1858年以降のインドシナ植民地建設及び植民地行政に関わる文書が保存されている。今回の調査では、1879～1895年にかけてタイバック地方を含むメコン中上流域の探検調査を行った Pavie 調査団の手稿、報告書群（一部現地語文書の添付あり）やタイバック地方及びその周辺地域の理事官報告、商業レポートなどを収集することが

できた。これらの史料は、19世紀末～20世紀前半のタイ族の社会状況及びインドシナ北部に広がるタイ族のネットワークを明らかにする上で極めて有用となるはずである。

またエクサンプロヴァンスの近隣に位置するアルルのタイ族難民コミュニティを訪ね聞き取り調査を行い、ライフストーリーの聞き取りと同時に、様々なイベントを通じた文化保存とインターネットを含む様々なメディアを通じた文化発信、世代間でのタイ族アイデンティティの差異などに関する情報を得た。

【9月15日～9月27日、パリ】

国防省軍事史料館での調査を続行したほか、仏領インドシナ・トンキン保護領の地方官僚と在地権力システムを研究しているパリ第7大学の Emmanuel Poisson 准教授と面談し、フランスでのベトナム史研究の現状について伺い、また本研究の方向性についても議論した。ローカルな社会及びネットワークから国家行政を逆照射するという点においては、アプローチが共通しており有意義な意見交換ができた。

以上のように、パリ及びエクサンプロヴァンスの文書館での文献調査、アルルのタイ族コミュニティでの聞き取り調査を行い、当地の研究者との学术交流を進めることができた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今次の調査では、植民地文書が近世～現代におけるタイ族ネットワークの解明にどの程度利用できるかを確認することも目的の一つであったが、海外文書センターには想像以上の規模で関係文書が存在し、特に理事官報告が情報量の少ない内陸山地世界において貴重な量的分析の材料となりうるということがわかったのは大きな収穫であった。特に周辺地域の理事官報告と組み合わせることにより、タイ族ネットワークの空間的広がりが明らかになる可能性が出てきた。また、パリの国防省軍事史料館に保存されているインドシナ戦争期の文書からはタイ族兵士の動員状況など詳細な情報を含むもので、現在の在仏タイ族コミュニティとインドシナ地域を文字史料上で結びつけることができる非常に重要な史料群であることが確認できた。

上記のように、史料の量が想像以上で、関係する文書を網羅的に収集するには時間が足りなかったが、特に重要な文書群を中心に研究の基幹となるデータを得ることができた。今後、派遣者がこれまでベトナムやタイの文書館で収集してきた同時期の文書と照らし合わせることにより、植民地期のタイ族社会の動向及びネットワークの動態を把握することができるよう分析作業を急いでいる。

派遣後の研究発表の予定

既に行われた11月11日の史学会研究大会での研究報告でも今回の研究成果を一部利用したのをはじめ、今後も国際タイ学会 (International Conference on Thai Studies) など国際学会を含め研究成果を発表してゆく予定である。

また、今回の研究成果は、リブレット<アジアを学ぼう> (風響社) シリーズの1冊として来年度公刊予定の単行本の重要な一部を構成する予定である。